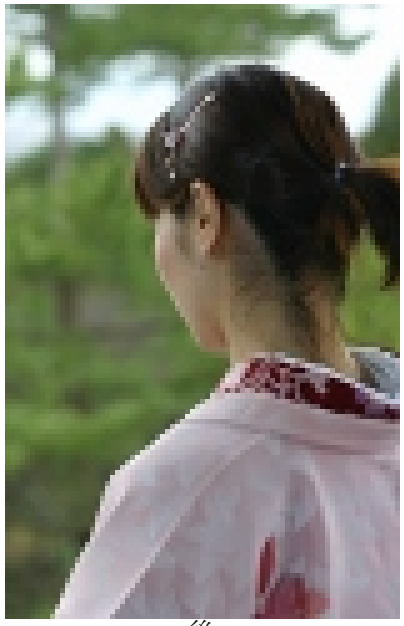
九　花の色は　移りにけりな　いたづらに　我が身世にふる　ながめせし間に

小野小町



後ろ姿

〈声に出してよんでみよう〉

ハナノイロワ　ウツリニケリナ　イタズラニ　ワガミヨニフル　ナガメセシマニ

＊初句の「花の色は」の、音の数を数えてみましょう。「ハ・ナ・ノ・イ・ロ・ワ」。六音ですね。これは、「五・七・五・七・七」の定型からはみ出してしまっています。このような場合を、「**字余り**」と言います。反対に、足りない場合は「**字足らず**」と言います。

しかし、どちらの場合も音読する時はあくまでも「五・七・五・七・七」のリズムに乗せて読みます。このため、字余りの歌には切迫感が、字足らずの歌には空白感が、生まれるという効果があります。

〈どんな意味だろう〉

桜の花の色は移り変わって、すっかり色あせてしまったなあ！

むなしく、私が人生を過ごし、降る長雨を眺めてぼんやり物思にふけっている間に・・・。

（桜の花の色と同じように、私の容色もすっかり衰えてしまった・・・！）

＊「いたづらに」は、むなしく、無駄に、という意味です。現代語の「いたずら」と違って悪ふざけの意味ではありませんので、注意しましょう。

＊「ふる」には、「(雨が)降る」と「経る(年月を過ごす)」の二つの意味が、また、「ながめ」には「長雨」[1]と「眺め(物思いにふけってぼんやりと遠くを見ること)」の二つの意味が、それぞれ込められています。このように、同音であることを利用して一つの表現に複数の意味を持たせる和歌の修辞技巧を「**掛詞**」と言います。掛詞には、三十一音という限られた形式の中に、重層的な意味を持たせる効果があります。

＊第二句「移りにけりな」の最後の「な」は、現代語の「なあ!」と同じく、文末で詠嘆・感動を表します。したがって、この歌は第二句が文末で、ここで切れることになります。このような歌の構造を「**二句切れ**」と言います。第三・四・五句は、**倒置**されています。倒置とは、通常とは逆の語順で表現することで、最も強調したい部分を先に述べる技法です。

〈解説〉

この歌の作者の**小野小町**は、絶世の美女であったと伝えられています。古代エジプトの女王クレオパトラ、中国の楊貴妃、そして小野小町の三人を、俗に、世界三大美人と呼ぶほどです。また、現代の若者はあまり使わなくなりましたが、少し前までは、その土地一番の美人のことを「○○小町」(○○は地名)と言ったりしていました。百人一首の「かるた」で小町がいつも後ろ姿で描かれるのも、その美しさをとても絵に描ききれないから、とも言われています。

そのような小町ですが、時の流れには逆らえず、いつしか美貌は衰えて行きました。その嘆きを、静かに、あきらめを込めつつ歌ったものが、この歌です。しかし、自分の容貌を桜の花にたとえる点には、小町のプライドが感じられます。「百人一首」には、この歌の他にも桜を詠んだ歌が何首もあります。咲く花の美しさ、そしてその散り際のはかなさ・潔さで、桜は当時から現在に至るまで、日本で最も愛されている花と言えます。林芙美子（一九〇三―五一）という作家は、「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」という有名な言葉を残しています。

〈作者と出典〉

小野小町は、九世紀頃の人と言われていますが、その生涯の詳しいことはわかっていません。その代わり、小町には多くの伝説があります。絶世の美女であったこと。数多くの男性に求婚されたが、振り向きもしなかったこと。中でも最も熱心な求婚者であった深草少将に、百夜連続して通って来たら思いをかなえようと言い、少将は毎晩通い続けたが、九十九夜目についに亡くなってしまったこと。小町は、晩年は貧しさの底に沈んだこと。死後、その頭蓋骨からススキが生えていたこと、など。これらの伝説をもとに、後世、多くの文学作品が作られました。中でも、**能**には「小町物」と呼ばれるジャンルがあるほどです。能とは、一種の仮面劇で、十四世紀頃成立した日本の伝統芸能です。なお、秋田の米のブランド「あきたこまち」や、秋田新幹線の「こまち」は、小野小町の出身が秋田であったという伝説に基づく名です。但し、この伝説も他の伝説と同様、信頼性はあまりありません。



ススキ



新幹線



田

この歌の出典は、最初の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編集された和歌集）である**『古今和歌集』**（九〇五年頃成立）です。この歌集に収められている、小町の次の恋の歌三首も有名です。

思ひつつ　寝ればや人の　見えつらむ　夢と知りせば　覚めざらましを

（恋しいと思いながら寝たから、あの人が現れたのだろうか。夢だと知っていたら、目覚めたりしなかったのに・・・。）

うたた寝に　恋しき人を　見てしより　夢てふ物は　頼みそめてき

（うたた寝で、恋しい人を見た時から、夢というものを頼りにし始めた。）

いとせめて　恋しき時は　むばたまの[2]　夜の衣を　返してぞ着る

（とても胸に迫って、恋しい時は、夜の着物を裏返して着るのです。そうして寝ると、夢で会えると言われているから・・・。）

---

1 「長雨」は、現代語では「ながあめ」と読みますが、古代は母音の連続が回避される傾向にあり、二つ目の母音の「あ」が脱落して「ながめ」と読まれていました。

2 「むばたまの」は、「夜」「黒」などの枕詞です。枕詞とは、和歌の修辞技法の1つで、ある言葉の前に付ける飾りのような、通常五音の言葉です。枕詞の意味や効果は、現代ではだいぶ分からなくなっているのですが、言葉というものの持つ魔力や呪術性に関連があるのではないかと言われています。